

観察

みる

「食料基地」北海道の今後によせて

一強みと弱み、そして今後の方向

一般社団法人 北海道地域農業研究所
所長 副理事長 飯澤理一郎

一・はじめに

今を去る五〇年ほど前、私は山形県の片田舎、人口三万人ほどの街から札幌市にやつて來た。田舎育ちの一八歳の少年にとって札幌市は活氣あふれた、目を見張るばかりの“大都会”で、これから的人生に大きな夢と希望を抱かせるのに十分な街であった。

北海道にやつて来て、まず驚いたのは食材の豊富さであり、その美味しさであった。育ちが奥地であったこともあり、魚と言えばせいぜいサンマや鯖、ニシン、鮭などの塩干物（しつかり塩のきいた）・缶詰がいいといつて、蟹やホタテ・ホツキ貝などもちろんホツケの一夜干しにすりお田にかかつたことはほとんどなかつた。

魚ばかりではない。農畜産物も同じである。今や大好きに

なつた“じやが・バター”を例に話を進めよう。“じやが・バター”と言ひ言葉を初めて耳にした時、漠然とじやがいもとバターを使ったものなんだらうなとは想像したもの、“ただふかしたじやがいもにバターを塗つただけ”とは全く思いも至らなかつた。もちろんじやがいもは山形でも獲れるが、しかし“繊維質”がとても“豊富”で“ふかしてそのまま食べる”といふわけにはいかなかつたからである。その他の農畜産物も同じである。“米”（五〇年ほど前の米です）を除けば天下一品、素材そのままで十分で、下手な“調理”など“いらない”と言わんばかりであった。北海道物産展と言えば“黒山の人集り”と言われるのも故なきことではない。如何に“量”だけあっても“美味しさ”を伴なつていなければ人々は“集ら”ないからである。その意味で、北海道はまさに天来の“わが国の食料基地”なのである。

二、美味しさが支える“域内自給率100%”

北海道の耕地面積は一五万ha。全国の四分の一を占める。そこは全国の一%ほどにしか過ぎない五万haほどの農家が営農しているから一畠当たり耕地面積は平均で10ha余。都府県と比較するのもあらがましいほどに、規模に恵まれている。“大規模・專業的”な“食料基地”なのであり、わが国の宝と言つて良い。

さて周知のようだ、そこで全国収穫量の六一%の小麦（三五万トン）、八〇%弱の春植え馬鈴薯（一七五万トン）、八九%の小豆（五万トン）、五〇%の玉葱（五七万トン）、五〇%の南瓜（一一万トン）、四九%の長芋（六・八万トン弱）、五一%の生乳（三九〇万トン）、実に一〇〇%と云つて良いほどの輕種馬などを産している。また、人口比を大幅に上回る七・一%、六〇万トンもの米も世に送り出している（表1参照）。それらは“稻作の空知・上川・道南、畑作の十勝・網走、酪農の根釧・天北”などと云われ、長芋の帯広川西、メークインの帯広大正・厚沢部、一三の知内、トマトの平取、メロンの夕張などと言われるよう、それぞれに地域分化を遂げ“主産地”を形成しながら生産されてきている。

表1 北海道の農産物の収穫(生産)量(2010年) (単位:千トン、%)

	北海道	全 国	注
米	602 (7.1%)	8,478	
小麦	349 (61.1%)	571	
馬鈴薯	1,753 (78.4%)	2,237	ただし、春植え
大豆	58 (26.0%)	223	
小豆	49 (88.7%)	55	
いんげん	21 (94.1%)	22	
甜菜	3,090 (100%)	3,090	
スイートコーン	107 (42.2%)	235	
牧草	18,376 (66.6%)	27,580	
生乳	3,902 (50.5%)	7,720	

注) ラウンドの関係で必ずしも一致しない場合もある。
資料: 北海道「北海道農業・農村統計表」。

表2 主要農産物の域外移出の推移

年	米	小麦	澱粉	甜菜糖	馬鈴薯	野菜	生乳	牛乳	切花類
1980	316	222	237	333	580	468	61	84	63
85	485	345	257	467	603	570	42	144	333
90	471	408	201	534	681	820	250	183	3,677
95	466	292	223	537	628	879	473	190	7,320
2000	485	366	200	545	441	819	486	165	16,510
2005	382	472	191	677	433	898	476	258	11,414
2010	246	306	170	605	311	1,062	399	—	8,803
1980	62.0	89.2	88.4	62.2	68.0	43.4	3.0	28.0	2.5
85	68.6	89.1	96.3	81.4	63.4	46.3	1.7	40.6	9.9
90	69.2	83.1	85.2	82.5	63.1	49.8	8.1	46.8	43.4
95	70.6	88.5	85.1	82.5	48.7	54.3	13.6	44.9	52.2
2000	78.1	90.1	89.7	87.3	46.4	53.6	13.4	43.8	59.4
2005	73.0	87.3	82.5	90.7	49.2	61.9	12.5	54.1	65.6
2010	72.2	83.2	84.8	89.7	73.8	73.9	10.5	—	69.8

注1) 上段は数量、下段は出荷量に対する割合である。

2) 1985年以後の米には多用途利用米を含む。

3) 切花類の1980年欄の数値は1982年のものである。

資料: 北海道「北海道農業・農村統計表」。

北海道の人口は全国比四・三%、五四〇万人強にしか過ぎない。如上の生産量を誇れば大幅な“域内過剰”状態とならざるをえない。“域内自給率100%”とされることが自体、それを明示し、域外=都府県移出の必然性を示唆する。

表2は主要農畜産物の道外移出を示したものである。年によ

り昇降しつつも、ほぼ六〇%超の農畜産物が移出されてくる。

生乳だけ一〇%台と低いが七〇%を超える乳製品が移出されていなければ、未処理・未加工の生乳ではなく少なくて一次加工されたものが移出されていると見ても良い。その量は一〇一一年で米三一万トン余、小麦四〇万トン、澱粉一三万トン、甜菜糖四八万トン、馬鈴薯一九万トン、乳製品六三万トンなど。切り花は一億本に迫る勢いを見せ、野菜に至っては一二二万トンを超えている。比率上はもろもろ物量面から見ても「道外移出=需要」あつての北海道農業なのである。それを支えるものこそ道産農畜産物の「美味しさ」に他ならない。古に「猫またき米」「ぬみはないがウマみのある米」などと揶揄された北海道米にもついに「特A」米が誕生するなど、美味しさに磨きがかかるってきたのであり、その追求こそが北海道農業の一面を物語つてしまふと言へる。

三、しかし、弱さも一原料を移出し

製品を買う北海道

しかし、喜んでばかりいられない。農畜産物それ自体の美味しさが際立っていたこともあってか、「へたな加工は要らない」と言わんばかりに、食品加工への取り組みが些か立ち遅れてしまつたような気がしてならない。

いやもんないとはない。「三割産業」(事業所数・従業者数・製品出荷額で北海道の工業の中でも三割を超える)と言われるほどに北海道では食品工業は隆盛を極めている、との声が返つて来るのみである。確かにその通りである。

表3にあるように二〇一二年時点では、道内には一〇〇の工場が操業しており、八万人ほどの従業員を雇い、二・一五兆円余の出荷額をあげている。工場数こそ遠く農家数に及ばないものの、従業員では基幹的農業従事者とほぼ並び、出荷額では農業産出額の一倍にも達している。

表3 食品工業の業種別構成（2013年）

	事業所数	従業員数	製品出荷額（千万円）	事業所当出荷（万円）	1人当出荷（万円）
畜産食料品	220 (10.5)	11,434 (14.4)	59,899 (27.8)	272,268	5,239
水産食料品	913 (43.3)	26,948 (33.8)	65,702 (30.5)	71,963	2,438
野菜缶詰・農産保存	74 (3.5)	2,553 (3.2)	*3,512 (1.6)	47,459	1,376
調味料	40 (1.9)	1,500 (1.9)	*2,861 (1.3)	71,252	1,907
砂糖	11 (0.5)	1,064 (1.5)	8,521 (4.0)	774,636	8,008
精?・製粉	40 (1.9)	709 (0.9)	7,943 (3.7)	198,575	11,203
パン・菓子	221 (10.5)	12,892 (16.2)	19,475 (9.0)	88,122	1,511
動植物油脂	11 (0.5)	273 (0.3)	*279 (0.1)	25,364	1,022
その他	399 (18.6)	18,938 (23.8)	24,856 (11.5)	80,440	1,312
飲料	82 (3.9)	2,015 (2.5)	*12,058 (5.6)	147,049	5,984
たばこ	—	—	—	—	—
飼料・肥料	89 (4.2)	1,342 (1.7)	10,227 (4.7)	114,910	7,621
計	2,100	79,668	215,406		

注) () 内は計に対する%。
資料：北海道「北海道工業統計」より作成。

である。

しかし、問題はその内容である。製造品出荷額で見ると「水産食料品」（以下、業種分類が紛らわしいので「」を付す）を除けばトップは「畜産食料品」の六千億円弱であり、以下「その他」の食料品（一・五千億円）、「パン・菓子」（一・九千億円）、「飲料」（一・一千億円）などの順となつてゐる。「畜産食料品」では原料立地・一次加工型の牛乳・乳製品（バター・脱粉・チーズ・クリームなど、菓子などの原料ものが多い）が多く、また「その他の食料品」では道内需要に対応したそつ菜、すし・弁当・調理パン、レトルト食品が大半で、「パン・菓子」も道内需要を中心とする想定される。更に、「砂糖」「精穀・製粉」「野菜缶詰・農産保存」なども原料立地・一次加工型と推察でき、『三割産業』とされる道内の食品工業も一方では原料立地・一次加工型、他方では道内消費依存型の二極的構成を取り、例えば都府県のスーパー棚を常時飾るような『最終製品』を送りだす志向・力が些少弱いのではないかとも思われるるのである。

「北海道産業連関表」（北海道開発局）から作成した表4がそれを傍証しているのではないだろうか。産業連関表は公表までに時間を要するため、一〇年も前の二〇〇五年表で我慢するしかないが、耕種農業・畜産・肉酪製品、そして水産食料では都府県への移出額が移入額を大幅に上回つてゐる。しかし、道

内需要額が一・六兆円弱にも達し圧倒的割合を占めるその他ではその関係が逆転し、移入額が移出額を大きく上回つてゐる。三千億円台と停滞的な移出額に対して移入額は四千億円余から六千億円余へと増大し、今や道内生産額の過半を超えて、道内需

表4 食料品の道内生産額・需要・移出入など

(単位：億円、%)

	道内需要	移 出	需要合計	移入(控除)	道内生産額
耕種農業	1990	5,411	3,701 (56.6)	9,113	2,011 (30.7) 6,544
	1995	6,105	4,096 (52.7)	10,241	1,861 (23.9) 7,775
	2000	5,417	3,859 (57.7)	9,279	1,955 (29.2) 6,685
	2005	5,363	4,044 (56.8)	9,413	1,367 (19.2) 7,123
畜 产	1990	4,110	1,526 (28.0)	5,638	34 (0.6) 5,449
	1995	5,248	1,833 (26.9)	7,080	70 (1.0) 6,813
	2000	4,858	2,228 (32.7)	7,088	67 (1.0) 6,816
	2005	4,934	2,068 (30.4)	7,005	37 (0.5) 6,808
肉酪製品	1990	2,874	3,481 (62.4)	6,401	334 (6.0) 5,580
	1995	2,912	3,828 (68.1)	6,743	513 (9.1) 5,620
	2000	2,804	3,335 (70.4)	6,142	685 (14.5) 4,740
	2005	2,706	3,461 (74.5)	6,177	863 (18.6) 4,643
水産食料	1990	4,108	6,615 (72.0)	10,904	466 (5.1) 9,185
	1995	3,525	6,199 (79.3)	9,739	611 (7.8) 7,819
	2000	3,074	6,829 (90.7)	9,956	1,130 (15.0) 7,530
	2005	2,387	4,335 (83.8)	6,895	636 (12.3) 5,171
そ の 他	1990	11,746	3,708 (35.8)	15,438	4,350 (42.0) 10,348
	1995	15,396	3,079 (24.9)	18,478	5,242 (42.4) 12,352
	2000	15,599	3,691 (29.8)	19,296	5,895 (47.6) 12,374
	2005	15,989	3,431 (28.8)	19,434	6,085 (51.1) 11,917

注) () 内は道内生産額に対する割合である。

資料：北海道開発局「北海道産業連関表、33部門取引基本表より作成。

要額の三八%にも達しているのである。その他の主力は菓子類や冷凍調理・レトルト食品、総菜・すし・弁当などの最終製品であり、その原料として北海道産の乳製品やハム・ソーセージ、澱粉などが使われていても何う不思議はない。

これからから“膨大な一次加工品を都府県に送り出し、それらを原料とした最終製品をせつせと買い戻している”、と言つるのは酷に過ぎてゐる。事実、スーパーの店頭を覗いても、菓子棚の大方は都府県産で占められ、レトルト・冷凍調理食品棚も

事情は同じである。
今はやうの“デパ地下”も都府県の総菜屋や菓子メーカーなどが優勢を占め、北海道はその後塵を拝

している感は否めない。

“原料に勝る製品なし”とは良く聞く言葉である。既に触れたように北海道の農畜産物は天下一品の品質と言つて良い。

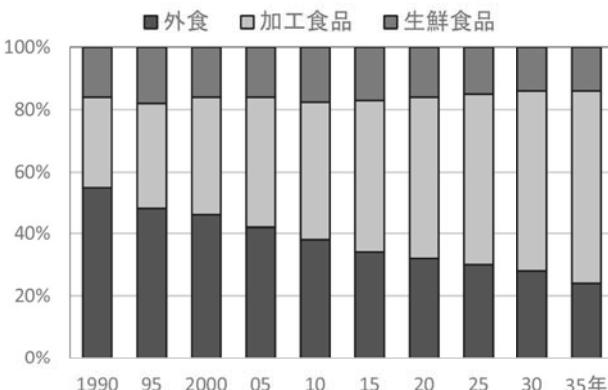


図 単独世帯の食料支出の推移 (%)

資料：「日本農業新聞」2015年10月31日号。現資料は農水省資料。

天下一品の素材から生まれる一次加工品はむりむり、高次加工品＝最終製品も天下一品、素晴らしいものに違いない。しかも、そこには多くの仕事（雇用）が生まれ、また各種食資材や包装資材などを取り扱う様々な産業分野も必要とされる。まさに食産業クラスターの形成なのである。

スーパーの店頭や家計調査年報のデータ（世帯数で最も多く今後ますますその比重を高めると推定される単独世帯を図に掲げた）を見るまでもなく、今や“加工食品”的時代である。農畜産物＝食素材の良さをベースに北海道は加工への巨歩を歩み始める時ではないだろつか。

四・おわりに—巨大な歩みは小さな一步から・農業の六次産業化・農商工連繋のすすめ

そんなことは田舎も承知とお叱りを受けたりである。

しかし、問題は如何に第一歩を踏み出すか、である。“巨歩”と言つたからといって、“最新鋭の大型工場を建て今すぐにでも大量の最終商品を全国に送り出そう、などと語りつもりは全くない。確かに、毎日のようになくて企業の大型化・効率化などの報に接していると、食産業としてそつあらねばならないとの思いに駆られてしまう。しかし、私にはその逆の道にいたる未来があるのではないかと思えてならないのである。エエの朝だ

「マッシュ」や米菓の亀田製菓、ゆずの馬路村などの例を持ち出された段階で、スタートは実に小さなものの、地場・地域市場に立脚するしかないようなことのからなのである。少額の投資で小さく始めたが故に逆に安堵感を持つことがでも、またじっくり時間をかけ、思い切った挑戦・試行・冒険に打って出るにじができたのではないのか。そして、それらが土台じめにならざり、今日の隆盛へと連なつていったのではないのか。北海道内でも六次産業化や農商工連繫に成功したといわれたそのことを雄弁に物語つているような気がしてならない。

巨大な歩みも実に「小さな一歩」からスタートしてくるのである。

「小さな一歩」からじっくり時間をかけて進むべし、これが六次産業化・農商工連繫は挑戦心や『冒険心』、そして夢を育み、大きく花開かせる可能性を秘めているとも言える。されば、今話題の「下町ロケット」物語とも通底しているとも言える。ただし単に「金」を稼ぐために取り組むのではない。まさに、その逆である。「わが故郷・地域、そして食料は共に守り、作る、との志向を、それは色濃く宿しているのである。賛同・共感の輪、すなわち、それを通じて生まれた食品等に対する愛着の輪が地域住民を始め、さまざまな団体・組織にじわじわと広がり、やがて大きなうねりになつていくだらう」とは疑いなし。

地域と共に創り、進む「最終商品供給・移出基地」

「北海道」の出現である。それへ向けての小さいが偉大な槌音が北海道の隅々から聞こえてくることを大いに期待したい。

